

修身が教育の基本だった

里草会顧問 福井正樹

冬に疎開して雪が降っているころ、のりちゃんが最初に遊びに来てくれて、いつでも一緒に遊んでいた。言葉の違いがあってお互いに訳が分からなくてきょとんとしていることもあったが、すぐ慣れてきた。

言葉の違いは、最初だけだ。仏さんに毎朝水とご飯を供えるが、小さなお膳を渡されて「ののさんに供えて来い」と言われ持っては見たもののどこか判らない。鶏のいる縁側に行くと「おもての方だがな」と言われる。私はおもてとは外のことと思っているので土間に降りようとすると更に「おもてだがな」と言われる。庭に面した仏壇のある奥の間を「おもて」と呼んでいるのだ。なお庭のことはかどと呼んでいたがこのエッセイではややこしくなるので、かどのことは庭と言い庭のことは土間と表現している。先生に連れられて東北などに集団疎開した東京の小学生は、村の子供たちの方言が全く分からなくて意思疎通ができずに対立し、疎外された場合が多かった。

春になると祖父母は忙しいので、のりちゃんのおばあさんが私も一緒に面倒を見てくれた。のりちゃんには弟と妹があって、おばあさんがいつもせわをしていた。朝食を済ませてすぐのりちゃんのうちに行ってもまだ寝ている。そんなとき私は学校に行く前に集まって騒いでいる子供たちから、少し離れたところで様子見て過す。みんなが登校してしまうと淋しくなるのでのりちゃんのうちの外で待っている。おばあさんがあかちゃんに朝ごはんなどを食べさせて乳母車などを引きながら私とのりちゃんを連れてぶらぶらしてくれる。

天気が良いとトンネルをくぐって学校まで出かけることもある。授業が始まっているので校庭は静かだ。そんな時お手伝いか何かで遅れて来た子が、門を入ると奉安殿の前できちっと敬礼して校舎の方にかけていった。すごくすっきりしてきびきびと動き、立派に見えた。子供たちは帰ってくると学校のことをよく話した。計算など上の子が偉そうに教えたりして、それも何かの役に立っていたのであろう。

そんな時私達にも習ったことを教えてくれる。「父の恩は山より高く母の恩は海より深し」、というのだ。当時は教育の根幹として修身という科目があり、父母を敬い言われたことをきちんと聞き、それに従わねばならないと叩き込まれていた。大方は暗記させられていたのである。二宮金次郎の唄に、「おやのてをすけおととをせわし、きょうだいなかよくこうこうつくす」と手本が示されていた。自我は悪なのである。無私が理想だ。

親が真冬にタケノコが食いたいといえ、竹藪に入って念じるとタケノコが伸びて来る（孟宗）。酒を買ってこいと言われて金もなく途方に暮れていると滝の水が酒になった（養老乃瀧）などの儒教から来た孝子の話はいくらでもある。「焼け野の雉夜の鶴」のように、親は周りが火事で自分が焼け死んでも、子を守る献身的慈愛を持つものだと教えた。その恩は無限だ。たとえ「親 親足らずと雖も 子 子足らざるべからず」と親がダメでも子は子の務めを果たし「家貧しゅうして孝子いずる」と論じた。

この親子兄弟の秩序が徹底したら、それを広げて疑似家族制度に導入する。学校に行けば校長先生がお父さん、他の先生はお母さん、生徒は兄弟姉妹で、先生の言うことをよく守り助け合わねばならない。言うことを聞かねば拘束し体罰を加えて従うまで許さない。すべての人々がその価値観を順守するところに社会秩序が生まれる。師の恩は仰ぎ見るほど尊い。さらに日本の国は天皇陛下がお父さん、国民みな兄弟姉妹、天皇の命に従い国家に尽くさねばならない。子供にも分かる倫理で社会の秩序を固め、天皇を宗祖とする大家族主義（八紘一宇）で、一億火の玉となって戦争に突入していった。

私達が入学した時には修身はなく奉安殿は撤去されて、その部分だけ塀が厚く高くなっていて、しかし奉安殿には天皇陛下のご真影が懸けられ教育勅語が奉られていたとか、校長は式典で勅語を読み間違えて自殺したし、自分の命に代えても災害や空襲からご真影は守らねばならなかったことも、知っている。恩や義理は返しても返しても返し切れるものではなく、命をささげてやっとなるのである。鶴の恩返しのように助けてもらった恩を返すには、わが身を犠牲にして機を織るのである。天皇と祖国の恩に報いるのに命をささげた。特攻隊員は自ら敵艦に爆弾ごと突っ込んでいった。

私達とひと世代前の人、軍国少年の価値観が確立した時に敗戦をむかえている。作家の城山三郎は1927年生まれで志願して海軍特別幹部練習生として呉で敗戦を迎えた。そのエッセイを引用すると、

「士官は父親のごとく下士官は母親のごとく」というスローガンとはまるで異なり、上官たちは何かというと練習生を棍棒でぶん殴った。深夜ハンモックで寝ていて、突然ハンモックのひもを切られて地面に落ちたこともある。

叔父もちょうど同じように志願し呉で終戦を迎えている。けがなどすると「身体髪膚これ父母に受く、毀傷せざるは孝の始也」とスラスラ出てくる。敗戦までに全国民に染みわたっていた倫理感はそんなに急に変わるものではない。60年代に農村を廻っていたが、宴会では軍歌が必ず出てきた。カラオケのない時代だ。歴代天皇の名前をよどみなく暗記している人や軍人勅諭や教育勅語を直立不動で唱える人も居た。当時は級長で優等生だったのだ。「報国を心がけ忠節をつくし、死を鴻毛の軽きに比する覚悟」を骨の芯まで叩き込まれていた。敗戦後は天皇への忠誠は早く薄れたが、親への孝行や兄弟の秩序は別に否定する必要もないので今も受け継いでいる。また直立不動で整列し、一糸乱れぬ行進などは、当初はやらされたが、ラジオ体操が出てくる頃には崩れてきた。北朝鮮の行進にも勝る国民秩序を敗戦までは持っていたのである。私たちは修身は教わらなかったがその精神を継承する環境にあった。

雌猫は子育て授乳の時、発情しない。別の力の強い雄猫が子供を食べてしまい、交尾して自分の子を産ませることがあった。サルの群れにも子殺しの報告がある。親の恩や敬老などのかつての倫理を教えなくなってくると、子供や親への虐待や介護放棄も増加する。親を敬い、恩を返し、子をいつくしみ育てる倫理は、徹底的に修身で教えられてきたものだ。その教科が無くなって70年以上経過した社会は、動物の本性が出てきた。